

急性乳腺炎の診断と治療

多くが出産後早期の産褥期に発症することが多いです。症状として乳房全体あるいは一部に疼痛、発赤、腫脹があり、38℃を越す発熱が出ることもあります。膿瘍を形成すると皮膚表面の発赤や腫脹は限局性となり、波動の見られることもあります。患側腋窩のリンパ節腫大や疼痛も見られることがあります。産褥期ではなく、中年の婦人で散発的に急性乳腺炎のみられることもありますが、この場合は炎症性乳がんとの鑑別が重要となります。

診断：

臨床症状から診断は容易です。乳汁中の白血球の増加や起炎菌が同定できれば確診できます。また、乳腺内膿瘍を形成することもあり、超音波が参考となります。マンモグラフィーは産褥期では背景乳腺濃度が高く、超音波の方が有用性は高いです。

治療：

急性乳腺炎で蜂窩織炎様の症状がある場合は抗生剤の投与を考慮します。また、膿瘍を形成した場合は穿刺や切開排膿も必要となることがあります。